

〔論 文〕

# 小学校「外国語活動」及び「外国語」での 使用語彙と中学校「外国語」の連携

—動詞の～ing形の視点から—

金子朝子

## Abstract

This paper investigates the quantity of English vocabulary in the corpus compiled from teachers' manuals for elementary school English prepared by the MEXT. The corpus includes English both used by teachers to teach the lessons and presented in the student textbooks as well as the recorded scripts not printed in the textbooks for the newly started elementary school English curriculum in Japan.

In general, the quantity of types and tokens of vocabulary and word levels measured by WordSmith and Word Level Checker respectively increase as students go up to the next grade. However, from a grammatical point of view, the manuals include higher level grammar, for example, various uses of "verb + ~ing" form, which have been introduced in junior high schools in the former curriculum up until March in 2021.

The results show a new direction of the English curriculum that aims to foster a positive attitude toward communication among the learners by exchanging messages actively with each other in English without strictly relying on the grammar but on what they actually want to say from the beginning level.

## 1. はじめに

小学校では、2017（平成29）年公示の学習指導要領に基づいた外国語活動と外国語（英語）が2020年度から全面実施となり、2021（令和3）年度には中学校で全面実施、さらに2022年度からは高等学校で学年進行での実施が始まる。学習語彙を例にとると、小学校で600～700語程度、中学校で1600～1800語程度を加え、さらに高校で1800～2500語程度を学ぶことで、高校卒業時には最低4000語から5000語の習得を目指している。小学校では、身近で簡単な事柄に関する語彙を、個別に記憶していくのではなく、意味のあるコンテキストの中で学ぶ。中学年では繰り返して聞き、話し、高学年ではそれに加えて繰り返し読んだり書いたりして使うことを通してコミュニケーションを学んでいく。もちろん、ここで学ぶ語彙には受容語彙と発信語彙が含まれ、すべてが発信語彙となることが求められているわけではないが、『小学校学習指導要領（平成29年告示）』の「第2章 第10節 外国語 第2各言語の目標及び内容等 英語1 目標（3）話すこと〔やり取り〕ウ」に示されたように、「自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする」（p. 157, ll. 13-15）ためには、多くの語彙に繰り返し触れて、児童達が発信語彙の幅を広げていくことが期待されている。その実現を

託される英語指導者にとって小学校と中学校間での連携がどのように行われているのかを把握することは非常に重要である。

本研究では、筆者の作成による「*Let's Try!*と*We Can!*指導編コーパス」を用いた。このコーパスは、文部科学省が作成した小学校中学年用英語教科書*Let's Try! 1*と*Let's Try! 2*、並びに、すでに2020年度から使用が始まった民間7社から出版された高学年対象の検定教科書のベンチマークとなった文部科学省作成の*We Can! 1*と*We Can! 2*の指導書で用いられた英語をデータとしたものである。これまで、指導書で用いられている英語をデータとした研究は見当たらない。学習指導要領に沿って英語を学ぶ児童が、様々な機能を持つ「動詞の～ing形」をどのような段階を経て学ぶのか、また、どのように中学校での指導と連携がなされるのかを確認することで、今後の小学校英語教育の方向性を模索することを目的としている。

## 2. 調査方法と手順

本研究は以下の(1)～(3)の手順で行った。

### (1) コーパス作成と使用語彙の基本的分析

「*Let's Try!*と*We Can!*指導編コーパス」には、小学校中学年用の英語活動テキスト*Let's Try! 1*、*Let's Try! 2*の指導編と、高学年用の英語のテキスト*We Can! 1*と*We Can! 2*の指導編で用いられているすべての英語を収めた。テキストではなく指導編をコーパス化したのは、指導編には児童用のテキストにある英文に加え、テキストには印刷されていない動画のスク립ト、教師が指導する際に用いる表現例や教師と児童とのやり取りの例などが含まれ、児童が授業中に触れる可能性の高い英語をより忠実にコーパス化できると考えたためである。作成したコーパスをWordSmithと英文語彙難易度解析プログラムWord Level Checkerを用いて分析し、使用語彙に関する基本的な資料を得た。

### (2) 「動詞の～ing形」の抽出とその使用頻度の比較

WordSmithのWord Listを用いて、「*Let's Try!*と*We Can!*指導編コーパス」から使用語彙リストを作成し、その中から動詞の～ing形のみを抽出し、3年生から6年生までの学年進行に合わせて、その使用頻度と使用法の分析を行った。

### (3) 中学校での動詞の～ing形に関する指導との連携の検討

中学校における動詞の～ing形に関する指導について、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』を参照し、小学校との連携を検証した。

## 3. 結 果

### 3-1. 使用語彙の分析

WordSmithのWord Listが示した統計結果に基づいて、*Let's Try! 1*と*Let's Try! 2*、並びに*We Can! 1*と*We Can! 2*それぞれの総語数(tokens)と異なり語数(types)、また、標準化されたタイプ・トークン比(Type/Token Ratio, TTR)を比較した結果を図1と2に示した。総語数とは、同じ単語が何度使われていても、そのつど1回と加算したもので、述べ語数とも呼ばれる。異なり語数とは、同じ単語は1回だけ数える方法であり、すべて違う単語で書かれた文は総語数と異なり語数は同数になるが、そうでない場合は、総語数よりも少なくなる。

TTRとは、異なり語数を総語数で割ったものである。しかし、TTRには総語数が多くなるほどそ

の値が小さくなる傾向があり、それを避けるため 1000 語ごとに区切って TTR を算出し、その平均値を指標としたものが、標準化された TTR である。数値が大きいほど総語数に対する異なり語数の比率が多い、つまり文章の難易度が高いと考えられる。

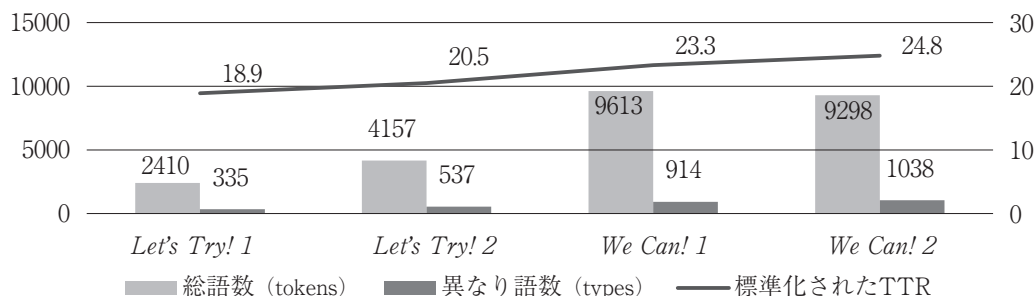


図 1. 総語数と異なり語数の推移

総語数は *Let's Try! 1* に比べ *Let's Try! 2* では約 1.7 倍に、更に *We Can! 1* では *Let's Try! 2* の 2 倍以上に増えている。しかし、*We Can! 2* では *We Can! 1* よりも減少している。異なり語数は、*Let's Try! 1* から *We Can! 2* まではほぼ一定率で増加している。標準化された TTR についても、*We Can! 1* から *We Can! 2* への伸びは少ないものの、異なり語数と同様の結果であった。

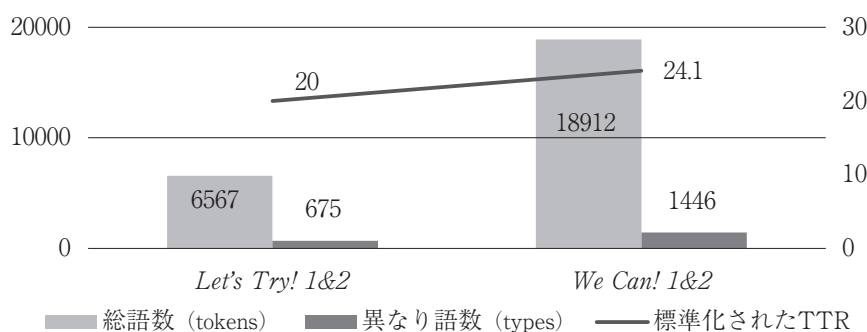


図 2. 中学年 (*Let's Try!*) と高学年 (*We Can!*) の総語数と異なり語数の対比

中学年と高学年での総語数を比較すると、高学年では中学年の 3 倍近くに増え、また、異なり語数も 2 倍以上になっていることがわかる。また学習指導要領で示している小学校で学ぶ 600~700 語を大幅に超えている。

使用語彙の難易度等については、英文語彙難易度解析プログラム Word Level Checker を使用して比較した。表 1 から 4 はその結果を示したものである。Word Level Checker は任意の英文に出現する語彙の難易度を解析するプログラムで、ベース辞書には 3 種類が用意されているが、その中で British National Corpus と日本人英語学習者の学習環境や中高の教育現場の状況にも配慮して作成されている『大学英語教育学会基本語リスト JACET List of 8000 Basic Words』(2003) (以下 JACET8000) を利用した。そのため、例えば固有名詞のように、JACET8000 に収められていない語彙は、表 1~4 にはカウントされていない。

表 1. 各語彙レベルに出現する総語数の推移

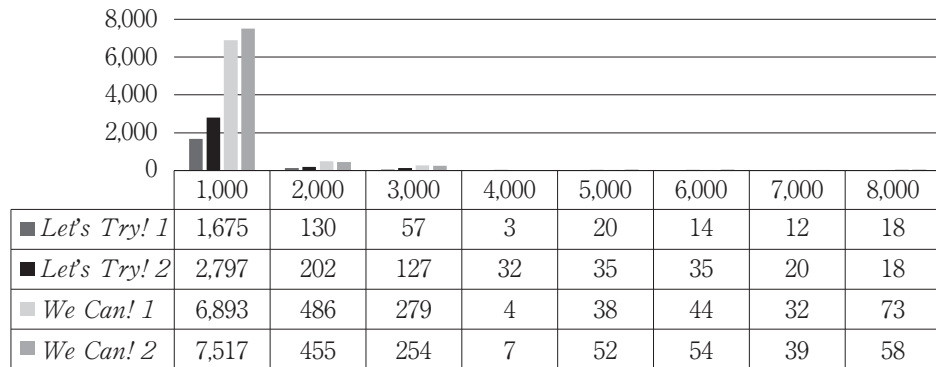


表 2. 各語彙レベルに出現する異なり語数の推移

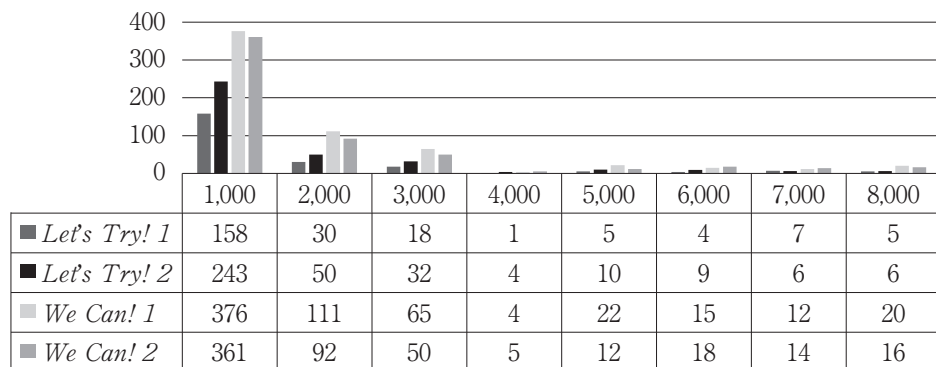


表 1, 2 の 1000 から 8000 の数字は語彙レベルを示し、1000 がレベル 1、2000 がレベル 2 など、1～8 レベルの分類を示している。相澤、石川、村田他編（2005）は、各レベルについて、以下のように説明している。

1000 語まで (Level 1):	中学校英語教科書などに頻出する基本的な単語。
1001～2000 語 (Level 2):	高校初級レベル。英字新聞 75%, 平易な読み物 90%程をカバー。英検準 2 級レベル。
2001～3000 語 (Level 3):	高校の教科書レベル。英検 2 級クリアのために必須。
3001～4000 語 (Level 4):	大学受験・大学一般教養の初級レベル。TOEIC 受験には不十分。
4001～5000 語 (Level 5):	難関大学受験・大学一般教養レベル。英検準 1 級最低基準, TOEIC 400～500 点相当。
5001～6000 語 (Level 6):	英語を専門としない大学生やビジネスマンの到達目標。英検準 1 級, TOEIC 600 点相当。
6001～7000 語 (Level 7):	英語専攻大学生や英語を使うビジネスマンの到達目標。英検 1 級, TOEIC 語彙 95% レベル。
7001～8000 語 (Level 8):	ここに到達すれば、あとは関連領域の専門用語を増やすのみ。

(相澤, 石川, 村田他編 (2005) pp. 5-6 に基づき筆者要約)

たとえば表 2 で、*We Can! 1* でレベル 1 の異なり語彙は 376 語使用されているが、レベル 1 の残りの語彙 624 語は使用されていないことに留意したい。上記の表 1, 2 では中学年、高学年共に、レベル 1 の語彙が中心であり Level 4 以上の語彙使用が急激に少なくなっていることもわかる。

次の表3, 4は、Word Level Checker を用いて、中学年の「外国語活動」と高学年の「外国語」で使われる総語数と異なり語数の平均語彙レベルの比較を行った結果を示している。

表3. 平均語彙レベルの比較: 総語数

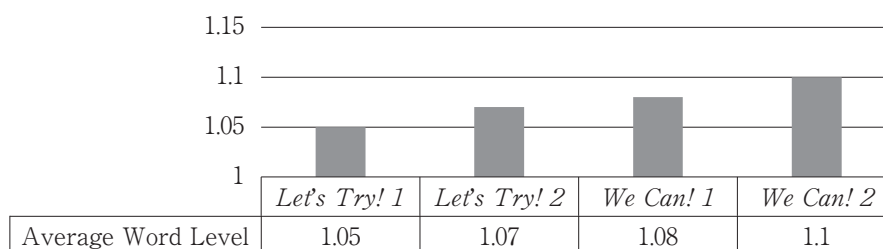


表4. 平均語彙レベルの比較: 異なり語数

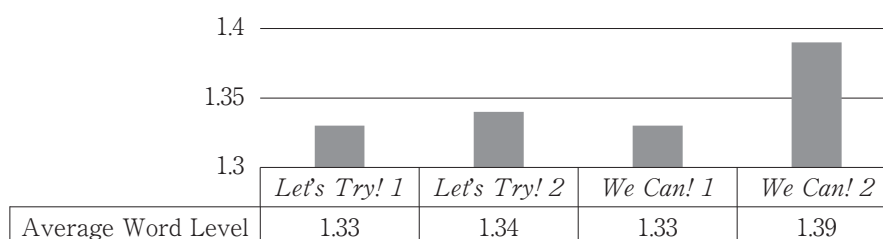


表3の総語数の比較では、*Let's Try! 1* から *We Can! 2* まで語彙レベルの平均が継続して高くなることが示されている。一方、表4で異なり語数のレベル変化を見ると、総語数の場合とは違って、*We Can! 1* で *Let's Try! 2* よりもレベルが下がっている。

図1では、総語数は *We Can! 1* の方が *We Can! 2* より多い結果であったが、表4で異なり語の平均語彙レベルを見ると、*We Can! 1* は *We Can! 2* よりも低いばかりでなく、*Let's Try! 2* よりも低いことは興味ある結果と言えよう。

### 3-2. 動詞の ~ing 形の使用頻度

WordSmith で作成した「*Let's Try!* と *We Can!* 指導編コーパス」の Word List によれば、46の異なる ~ing 形が用いられ、そのうち34については、動詞としても用いられている。動詞として出現しない ~ing 形は、hiking, viewing, camping, rhyming, dribbling, climbing, missing, hunting, cheering, juggling, sailing, shooting の12語であった。~ing 形の使用頻度を各テキスト間で比較した結果を図3に示した。

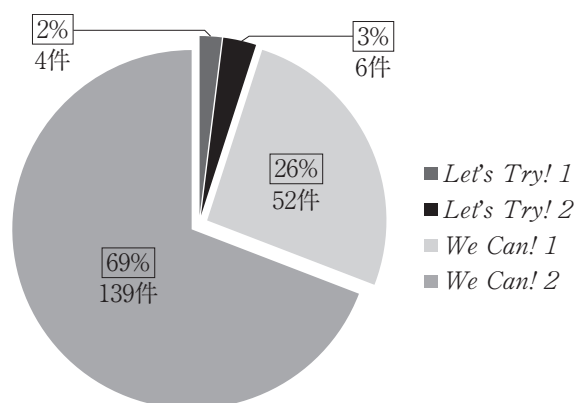
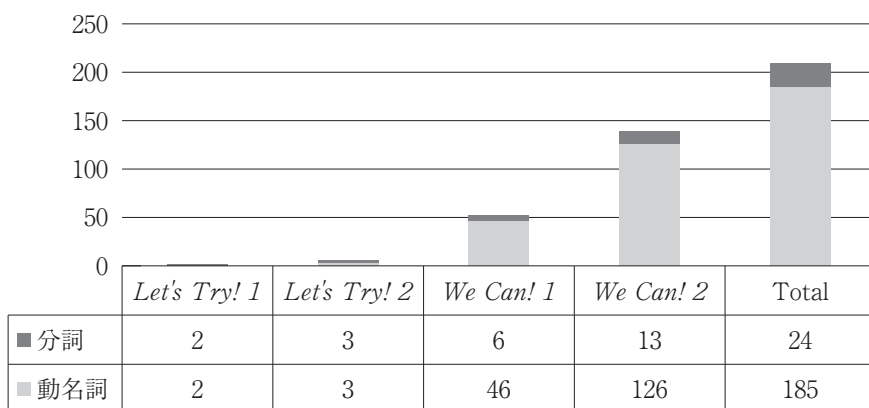


図3. 『*Let's Try! 1, 2*』と『*We Can! 1, 2*』での動詞の ~ing 形の使用頻度

全体的な傾向として、学年が上がるに従って動名詞と現在分詞を含む動詞の～ing形の使用頻度が高まり、特に *We Can! 1* を使用しての指導が始まる5年生は、3, 4年生の活動で使用された頻度の10倍程度となり、6年生では、さらにその使用が倍増している。

表5は、抽出した～ing形の文法的な機能を、動名詞としての使用と分詞としての使用に分類し、学年ごとの使用頻度を比較したものである。

表5. ～ing形の働きの分類と使用頻度



中学年では動名詞と分詞の使用頻度は非常に少なく、2年間で触れる回数も数回程度だが、高学年になると、分詞として用いるよりも動名詞としての使用が断然増え、*We Can! 2* では、更に増えている。以下に、動名詞と現在分詞の～ing形の使用例のうち、最も早い学年で用いられた例を示す。

<u>動名詞</u>	
1. 動詞の目的語として	<ul style="list-style-type: none"> <li>like ～ing: I like swimming. I don't like swimming. (<i>Let's Try! 1</i>)</li> <li>enjoy ～ing: In France people enjoy eating escargot or snails. (<i>We Can! 1</i>)</li> <li>watch ～ing: I want to watch sailing on Monday morning. (<i>We Can! 2</i>)</li> </ul>
2. SVCの補語として	<ul style="list-style-type: none"> <li>keep ～ing: Keep going. You can see it on your left. (<i>We Can! 1</i>)</li> </ul>
3. 前置詞の目的語として	<ul style="list-style-type: none"> <li>good at ～ing: She is good at playing the piano. (<i>We Can! 1</i>)</li> <li>for ～ing: Thank you for visiting our school. (<i>We Can! 2</i>)</li> <li>after ～ing: We cleaned up the park. It was very hard, but the students were happy after cleaning. (<i>We Can! 2</i>)</li> </ul>
4. 名詞句の一部として	<ul style="list-style-type: none"> <li>pointing ～: Let's play the Pointing Game. (<i>Let's Try! 1</i>)</li> </ul>
<u>現在分詞</u>	
1. 慣用表現として	<ul style="list-style-type: none"> <li>go ～ing: I go swimming on Fridays. (<i>Let's Try! 2</i>)</li> </ul>
2. 現在進行形として	<ul style="list-style-type: none"> <li>be 動詞 ～ing: He is helping Mr. Brown. (<i>Let's Try! 1</i>)</li> </ul>
3. 分詞の形容詞用法として	<ul style="list-style-type: none"> <li>Make a pair with a person sitting behind you. (<i>We Can! 2</i>)</li> </ul>
4. 分詞の副詞用法として	<ul style="list-style-type: none"> <li>They parade along the street dancing in colorful costumes. (<i>We Can! 1</i>)</li> </ul>

動名詞について、児童は *Let's Try! 1* の Unit 4 (p. 15) のチャンツ活動で、まず、好きな色について、色名である名詞を動詞 like の目的語として用いる “I like blue.” の表現に触れ、続けて好きなスポー

ツとして“I like soccer.”, さらに“I like swimming.”と好きなものを表す表現に繰り返し触れる中で動名詞～ing形にも触れる。文法的には、動名詞のswimmingを他動詞の目的語として用いる形である。さらに高学年になると、動名詞を用いた表現の幅が広がっていることがわかる。また、現在分詞の中で、特に注目したいのは、“I go swimming.”のswimmingで、自動詞goの後に続く形であり、“I like swimming.”のような他動詞の目的語としての働きとは全く違う文法的な働きをしているにも関わらず、“go shopping”, “go hiking”, “went camping”のようにgo + ～ingの慣用句として、聞いたり話したりしている。ちなみに、“I go swimming.”は*Let's Try! 2*のUnit 3 (p. 12)で初出となっている。分詞の形容詞用法や副詞用法の例は、教師の説明の中で使用されているものである。

上記の使用例の中で、現在分詞1の慣用表現として挙げたgo swimmingの～ing形について、大江(1983)は、「歴史的にはgo on ～ingで～ingは動名詞と」(p. 233, l. 7)分類されてきたとしつつも、「同時生起の分詞構文のかなり固定したい方」(p. 232, l. 25)であるとの理由から、現在分詞に分類している。これに基づいて、本研究では主語の内容を叙述する補語として考え、現在分詞に分類した。

### 3-3. 中学校での指導との連携

『*Let's Try!*と*We Can!*指導編コーパス』から抽出した小学校で学んだ～ing形を、中学校ではどのように指導していくのかについては、『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』に以下のように示されている。なお、引用における例文ごとの改行は適宜省略し、/で示した。

まず、動名詞について、同書では、「第2章 第2節 2内容〔知識及び技能〕(1)英語の特徴やきまりに関する事項 エ 文, 文構造及び文法事項 (ウ) 文法事項 h 動名詞」(pp. 49-50)に次のように解説されている。

#### h. 動名詞

動名詞は、以下のようなものを指導する。

We enjoyed dancing together. / Keeping a diary is not easy.

This room is usually used for eating lunch.

動名詞については、活用頻度の高い基本的なものを小学校において指導している。『小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編』に示された例文を以下に示す。

I am good at swimming. / I enjoyed fishing.

小学校の外国語科においては、基本的な表現として動名詞を含む文を指導することになっているが、動名詞を文から取り出して指導することはしない。例えば、好きなものを伝える時に、“I like playing tennis.”と表現することを指導するが、playing tennisの部分に焦点を当てて動名詞の使い方を理解させ、“Playing tennis is fun.”などの異なる表現の中で活用することを指導するわけではない。また、小学校段階では、音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現を書き写したり、例文を参考にして書いたりすることができるよう指導することとされているが、自分の力で書くことまでは指導していない。(中略) 中学校の早い段階で、こうした小学校で学んだ表現も取り上げ、音声で十分慣れ親しんだ動名詞を読んだり書いたりできるようにしたり、その使い方の理解を深めたりしながら、別の場面や異なる表現の中で活用できるように指導することが重要である。

また、現在分詞を用いた現在進行形については、「(ウ) 文法事項 e 動詞の時制及び相など」(pp. 47-48)に解説があり、その中から現在分詞に関わる部分のみを以下に抜粋した。

〈現在進行形，過去進行形〉

次のようなものを扱う。指導に当たっては，現在形や過去形などとの対比をしながら，これらの表現のもつ意味を理解させることが大切である。

Eri is opening the present. / My mother is talking on the phone.

(中略)

小学校段階では，音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現を書き写したり，例文を参考にして書いたりすることができるよう指導することとされているが，自分の力で書くことまでは指導していない。中学校の早い段階で，こうした小学校で学んだ表現も取り上げ，音声で十分慣れ親しんだ過去形を読んだり書いたりできるようにしたり，過去形の使い方の理解を深めたりしながら，別の場面や異なる表現の中で活用できるように指導することが重要である。

現在分詞については，「(ウ) 文法事項 i」(p. 50) に以下のような解説がある

i 現在分詞や過去分詞の形容詞としての用法

現在分詞や過去分詞が修飾する語の前に置かれる場合と後ろに置かれる場合を扱う。特に後置修飾は日本語にない形であり，語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導する必要がある。なお，いずれの場合も修飾する語との意味の関係を押さえた指導が重要である。

〈修飾する語の前に置かれる場合〉

My brother saw shooting stars last night. / I ate a boiled egg.

〈修飾する語の後に置かれる場合〉

Those monkeys taking a bath together are popular around here.

This is a book written by Soseki.

なお，go ~ing のように分詞が叙述的な形容詞として用いられている例については，中学校学習指導要領及びその解説には特に記述がなく，現場の指導では，主に慣用表現として扱っている。

#### 4. 考 察

まず，使用語彙の分析から見てきたことは，図1で，語数を比較すると *We Can! 1* の総語数が *We Can! 2* の総語数より多くなっているのに比べて，異なり語数は，*We Can! 2* の方が *We Can! 1* よりも多く，また標準化された TTR も学年が上がるに従って高くなっている点である。つまり，用いられる総語彙数は *We Can! 1* が最も多いが，語彙の種類は *We Can! 2* が最も多く，活動から教科への移行時であることを配慮し，*We Can! 1* では中学年で扱った語彙や表現を多く取り入れ繰り返し学び，*We Can! 2* では，使用語彙の種類を増やしていることになる。

図2で外国語活動として学ぶ中学年と，授業として学ぶ高学年の語彙数を比較することで，外国語活動と外国語の授業では，扱う語彙の数や質に違いがあることが明らかとなった。特に，異なり語数について注目したいのは，受容語彙が発信語彙に比べてより多く含まれているとしても，『小学校学習指導要領（平成29年告示）』「第2章 第10節 外国語 第2 各言語の目標及び内容等 英語2. 内容〔第5学年及び第6学年〕〔知識及び技能〕(1) 英語の特徴やきまりに関する事項 ウ 語，連語及び慣用表現 (ア)』(p. 139) に明記されている学習語彙の目安である600~700語程度はすでに中学年で触れており，高学年ではその2倍以上がカバーされている点である。

投野(2020)は，会話の約7割は，異なり語彙の動詞+機能語を含めたトップ100語で占められて



いと説明している。「Let's Try! と We Can! 指導編コーパス」には、レベル1の46の異なる動詞の～ing形が出現し、中学校段階で、それらの語彙が動詞に～ingを付けた形であり、加えて、動詞でなく名詞や形容詞などの役割を果たすことへの理解に繋がれば、小学校ですでに会話の7割を占めるとされるトップ100語の中の動詞の多くをカバーする準備ができていると言えよう。

語彙の難しさを表す語彙レベルについては、各語彙レベルに出現する総語彙数を比較した表1によれば、高学年になるに従って高くなっているが、異なり語を比較した表2では、ほとんどのレベルでWe Can! 1がもっとも高いことが示され、これも、図1で示されたことと同様に、中学年から高学年への活動から教科への移行時の特徴といつてよいであろう。また、例えば、We Can! 1の場合、レベル4の総語彙で該当する語数も異なり語で該当する語数も4であったことは、このレベルの語彙は4語で、すべてが1回だけしか指導の中で使われなかったことになる。レベル1の語彙は、これまでの指導要領では中学校で扱われていた語彙がほとんどで、ここに該当する語彙を十分に繰り返して使用し、定着を図ることで、中学校段階での指導では、これまでよりもさらに語彙や表現を増やしコミュニケーションの機会を増やすことを可能にしてくれることが期待される。

加えて、使用語彙の分析を示した表3,4も、児童が触れる総語数や語彙レベルは学年が上がるごとに伸びているのに対して、異なり語のワードレベルはWe Can! 1で、Let's Try! 2よりも少し下がっており、これも、先に検討したように、中学年で既習語彙や表現の定着のための配慮の現れであると考えられる。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』には、中学年については、「第1部 外国語活動 第2章 外国語活動の目標及び内容 第2節 英語 1 目標」（pp.18-24）で、聞くこと、話すこと（やり取り）、話すこと（発表）の3領域の言語活動を行い、必然性のある場面を設定し、語彙や表現の意味を推測したり、繰り返して使ったりしながら体験的に身に付けるように工夫した指導を、また、高学年については、「第2部 外国語 第2章 外国語活動の目標及び内容 第2節 英語 1 目標」（pp.75-82）で、聞くこと、話すことから始めて読むこと、書くことに繋げ、中学年の活動の学習内容を繰り返し活用し、広がりのある話題を設定し、中学校との接点を重視しながら、より豊かなコミュニケーションとなるよう、三人称代名詞、動名詞、過去形を含む基本的な表現に触れる指導を目指すことが示されている。こうした目的に沿うためにも、小学校で多くの動詞の～ing形に触れることは重要な意味がある。中学校で、文法的に高度な動名詞の補語としての用法や現在分詞の形容詞用法・副詞用法など、様々な～ing形に初めて触れ、それらを文法的に理解した上でコミュニケーションに繋げるのではなく、小学校での学びで自分が伝えたい考えや気持ちを表現するために、ある一つの意味を持つ語彙としてコミュニケーションの中で使う体験を経て、中学校で改めて文法的な役割を理解し、更に表現を広げる学びの順序が実現するからである。

S. Loewen (2020) は、こうした学びの違いを“rule-learning”と“item-learning”に区別し、説明している（p.24）。文法というルールとして学ぶことを“rule-learning”と呼ぶのに対し、一つ一つの表現をコミュニケーションの中で、個別の言語形式として学ぶことを“item-learning”と呼ぶ。教室内の言語習得では、これまで、語彙の意味や使い方を個別に覚えることが中心で、使うことで表現を身に付ける“item-learning”の機会の実現は難しかった。その理由は、教室内では、自分の気持ちや考えを伝えるために様々な表現を繰り返し用いる環境を作るのが難しいこと、また、大学受験で試される英語力にも影響を受けていたといつても過言ではないであろう。表現の“item-learning”は、母

話者が母語を学ぶ方法により近いもので、児童が教室内でそうした環境で学ぶことができるのは、画期的なものだと思われる。一方で、そのためには小学校の中学年から高学年へ、そして高学年から中学校への接続にはこれまで以上に、工夫が必要となるのではないだろうか。一般的にこれまでの中学校以降の教科書の構成は、文法中心であり、レッスンごとに新しい文法事項が指導される。授業は、そこまでの既習文法とその課の新出文法の範囲で行われ、教師もまた、児童が未学習の語彙や文構造・文法事項をなるべく使わずに指導する傾向にあった。更には、一度学んだ語彙・表現や文法は、その後に繰り返すことが多いとは言えず、残念な現状と言わざるを得ない。小学校段階では、文法にとらわれることなく、自由に自分の気持ちや考えを伝えるために必要な表現を、“item”として繰り返して聞き、コミュニケーションで積極的に使ってみることを体験してもらうことで、手続き的知識を身に付け、その表現の“rule”である文法は中学校以降で、宣言的知識として学び、すでに得た手続き的知識を確実なものにする指導と学びの手順が、これから定着していくことが期待される。そのためには、中学校との計画的で適切な連携が必須であり、中学校以降も小学校で学んできた語彙や表現を繰り返し、十分に定着させながら、それらを“rule”の側面からも学び、定着させていく必要がある。すなわち、“focus on forms”による指導も加えながら、さらに新しい語彙や表現を“item”として学ぶことで増やし、“focus on form”の学びを通し、コミュニケーションの幅を広げる機会を充分に作っていくことが大切なのではないだろうか。

## 5. まとめ

動名詞の～ing形である動名詞や現在分詞を小学校中学年ではコミュニケーションの中で繰り返し聞き、話し、高学年でそれを文字で読んだり書いたりすることも加えて繰り返し用いている。何か伝えたいことがあり、それを伝えるためにどう表現するかを、“focus on form”を通して、“item-learning”や手続き的知識としてまず身に付け、中学校では～ing形の文法的な働きなどの宣言的知識を“focus on forms”も活用して、より正確で適切な表現を身に付ける流れを作るとは、外国語学習の理にかなったものであり、新学習指導要領の方向性にも沿ったものであろう。まだスタートしたばかりではあるが、こうした学習の流れを小学校だけで終わらせてしまわず、中学校ではさらに語彙や表現の幅を広げながら、コミュニケーションを図る資質・能力をより高いレベルへと育成していきたい。そのためには学校間の連携を充分にとり、小学校と中学校が互いに、何を目的として、どのような教育をしていくのかを充分に理解し合うことが、これからの英語教育の効果を高めることに繋がるのではないだろうか。

いよいよ2021年度から中学校では、小学校で4年間の英語教育を受けた児童を受け入れて、新学習指導要領に基づいた外国語の指導が実施されている。中学校以降の英語教育が成功するかしないかは、小学校と中学校の指導の連携にかかっているといても過言ではないであろう。

### 参考文献および使用した英語分析ソフト

相澤一美, 石川慎一郎, 村田年編集代表 2005. 『「大学英語教育学会基本語リスト」に基づく JACET8000 英単語』 桐原書店

大江三郎 1983. 『講座・学校英文法の基礎 第五巻 動詞 (II)』 研究社出版

大学英語教育学会基本語改訂委員会編著 2003. 『大学英語教育学会基本語リスト JACET List of 8000 Basic Words』 桐原書店

- 投野由紀夫 2020. *Dictionaries & Beyond, Word-Wise Web*. Retrieved December 20, 2020, from [https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/en\\_teaching02](https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column/en_teaching02)
- 文部科学省 2017. 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編』
- 文部科学省 2017. 『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』
- 文部科学省 2018. 『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』
- 文部科学省 2018. *Let's Try! 1*.
- 文部科学省 2018. *Let's Try! 2*.
- 文部科学省 2018. *We Can! 1*.
- 文部科学省 2018. *We Can! 2*.
- 文部科学省 2018. 『新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 *Let's Try! 1* 指導編』
- 文部科学省 2018. 『新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 *Let's Try! 2* 指導編』
- 文部科学省 2018. 『新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 *We Can! 1* 指導編』
- 文部科学省 2018. 『新学習指導要領対応 小学校外国語活動教材 *We Can! 2* 指導編』
- Ellis, R. 2008. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Loewen, S. 2020. *Introduction to Instructed Second Language Acquisition* Second Edition. N.Y. Routledge.
- Word Level Checker 英文語彙難易度解析プログラム [http://someya-net.com/wlc/index\\_J.html](http://someya-net.com/wlc/index_J.html)
- WordSmith Tools <https://www.lexically.net/wordsmith/>

(かねこ ともち 英語コミュニケーション学科)